

# 琉球大学学術リポジトリ

## Development of the 12-item questionnaire for quantitative assessment of depressive mixed state (DMX-12)

メタデータ	言語: 出版者: University of the Ryukyus 公開日: 2020-09-14 キーワード (Ja): キーワード (En): major depressive episode, depressive mixed state, spontaneous instability, vulnerable responsiveness, disruptive emotion/behavior 作成者: Shinzato, Hotaka, 新里, 輔鷹 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/20.500.12000/46666">http://hdl.handle.net/20.500.12000/46666</a>

(別紙様式第7号)

## 論文審査結果の要旨

報告番号	課程博 * 第 号 論文博	氏名	新里 輔鷹
論文審査委員	審査日	令和 2年 1月 29日	
	主査教授	杜田 真一郎	印
	副査教授	石内 勝彦	印
	副査教授	松下 正之	印
(論文題目)			
Development of the 12-item questionnaire for quantitative assessment of depressive mixed state (DMX-12) (抑うつ性混合状態の定量評価に向けた12項目の自記式評価票の開発)			
(論文審査結果の要旨)			
1、研究の背景と目的 抑うつ性混合状態はうつ状態に躁的な活動成分が一過性に混在したものであるが、その病像は極めて不安定で純粋な躁またはうつ状態よりも衝動性を孕むことが多く、気分障害の症状や経過に悪影響を及ぼすことが知られている。したがって、この移ろいやすい混合性うつ病を速やかに評価・診断し治療にあたることは、気分障害の治療帰結や予後を良好なものにするために重要である。現在の操作的診断基準であるDSM-5では「混合性の特徴を伴う」を特定因子として付記できるようになり、「混合病像を伴ううつ病」の診断が可能となった。 しかし、新診断基準も定型的な躁/軽躁とうつ症状との理論上の混合を想定したため、臨床で遭遇しやすい「内面・外面に現れる不安定さ」「変動する感情/思考」などの非特異的な要素は反映されず、その診断頻度も数%にとどまり、多様な混合病像の全貌を鋭敏に捉える基準となりうるのか疑問が残る結果となった。一方、Benazziが提唱した「混合性うつ病」では、臨床で遭遇しやすい転導性、易怒性、焦燥を混合症状として取り入れたため、約1/3の患者が診断基準に該当した。このように診断基準の違いで抑うつ性混合状態の頻度が大幅に変動する点や抑うつ性混合状態に特化した重症度の評価スケールもないこと大きな問題である。			
2、研究内容 本研究では一定の感度で抑うつ性混合状態を定量する、頻度の高い非特異的症状を含む12項目の評価票として、Assessment for Depressive Mixed State-12 (DMX-12)を開発し、うつ病エピソード時の抑うつ性混合状態の症状構造や重症度を検討した。琉球大学医学部附属病院をうつ病で受診した154名が対象となった。うつ病エピソードでは、DMX-12で示される動的で不安定な症状成分が一定の割合(5.2-38.3%)で混在した。『内発的な不安定さ』『脆弱な応答性』『破壊的感情/行動』の3因子構造の抑うつ混合症状モデルが抽出された。DMX-12で示される混合成分は、若年層により多く認められ、うつ病の重症度に伴い増大した。DMX-12総得点および『破壊的感情/行動』の得点は、単極性うつ病よりも双極性うつ病において有意に高値を示した。DMX-12による定量的な症候評価は従来の混合性うつ病(Benazzi)・混合性の特徴を伴ううつ病(DSM-5)のカテゴリカル診断と良く符合した。			
3、研究結果の意義と学術的水準 抑うつ性混合状態を定量的に評価した報告は極めて少なく、本邦においては本研究がその			




端緒となる。本研究の結果により若年で双極性を秘める重度のうつ病エピソード患者では抑うつ性混合状態のリスクに十分注意を払うべきと考えられた。破壊的感情/行動の因子得点は抑うつ性混合状態を識別する指標として有用である可能性が示唆された。今後の抑うつ性混合状態の病態像や治療帰結の解明のさらなる発展が期待される。

以上により、本論文は学位授与に十分値するものであると判断した。

- 備考
- 1 用紙の規格は、A4とし縦にして左横書きとすること。
  - 2 要旨は800字～1200字以内にまとめること。
  - 3 \*印は記入しないこと。

(別紙様式第 8 号)

最終試験結果の要旨

報告番号	*課程博第	号	氏名	新里 輔鷹
		審査日	令和 2 年 1 月 29 日	
論文審査委員		主査教授	松田 真一郎	 印
		副査教授	石内 勝吾	 印
		副査教授	松下 正之	 印
<p>(最終試験結果の要旨)</p> <p>最終試験は口頭による公開討論によって行い、以下の件について確認した。</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 提出論文の内容、意義について十分に把握していること。</li> <li>2. 研究の背景、目的と方法について熟知していること。</li> <li>3. 研究の結果について正しく理解していること。</li> <li>4. 関連する国内外の研究を良く把握していること。</li> <li>5. 研究成果の展望について確かな見解を有していること。</li> </ol> <p>審査の結果、これらに関連する質問に対して十分満足する回答が得られたため、本学大学院博士課程を修了するに値すると判断し、最終試験は合格とした。</p>				

- 備考 1 用紙の規格は、A4とし縦にして左横書とすること。  
 2 \*印は記入しないこと。